

# ロシア語に見られる主題卓越型特徴について

匹 田 剛

## 0. はじめに

本稿はロシア語に見られるいくつかの主題構造に複数の理論的立場から考察を加え、異なる理論が同じ現象をそれぞれどのように見るかを概観することを目的とするが、それと同時に複数の理論による「洗礼」を受けることによってある分析がより説得力のあるものになることをも示したい。なお、立脚する理論は生成文法（形式主義）、現実的文分節（機能主義）及び類型論の3つである。

以下、第1節では生成文法的、即ち形式論的に分析したロシア語の主題構造を現実的文分節の理論に基づいて考察し直す。第2節ではそれらを類型論における「主題卓越型言語」と「主語卓越型言語」という分類基準に当てはめることによってどう見えるかを考察する。

## 1. ロシア語の主題構造

本節ではロシア語において統語的な手段によって示される主題構造を筆者の過去の研究において明らかになった範囲において概観するが、そこではロシア語の主題構造は少なくとも2種類、即ち、移動によるものと移動によらないものがあることを示す。また、分析は基本的に形式論の観点から行うが、それらを機能主義的な理論である現実的文分節の理論にも照らし合わせて、異なる観点から見るとどの様に捉えられるかを示す。以下、1.1. 節では移動による主題構造を、1.2. では移動によらない主題構造をそれぞれ形式論と

機能論の両面から考察する。

### 1.1. 移動による主題

ロシア語はしばしば語順が「自由な」言語であると言われる。例えば、3つの要素からなる文であれば  $3 \times 2 \times 1 = 6$  通りの語順が全く問題なく可能である。

(1)

(a) Ваня любит Машу.

Vanja-nom. loves Maša-acc.

「ワーニャがマーシャを愛している。」

(b) Ваня Машу любит.

(c) Любит Ваня Машу.

(d) Любит Машу Ваня.

(e) Машу Ваня любит.

(f) Машу любит Ваня.

このように語順が「自由に」動く現象を以下、語順の「かき混ぜ」現象と呼ぶことにする。Hikita (1989), 匹田 (1993) はロシア語のかき混ぜ現象を説明するために節点Sへのチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) という移動規則を設定することによって説明されるべきであるとした<sup>1</sup>。これは例えば以下のような構造の変換を行うプロセスである。

<sup>1</sup> ただし、ロシア語のかき混ぜ現象が全てこの規則によって説明できるかどうかは今のところ不明である。例えば、Hikita (1989) はこのような左方向への移動の他に右方向への移動の存在も可能性があることを論じた。また、Bailyn (2003) は上で示した左方移動の他に Inversion というプロセスを提案している。



う。その場合、*Разводит цветы*「花を育てる」が主題となり *отец*「父」が題述として機能する。その結果、主題が題述に先行するため、以下のような語順の文が用いられることになる。

(3) — *Кто разводит цветы?*

「誰が花を育てているのですか？」

[topic РАЗВОДИТ ЦВЕТЫ] [comment ОТЕЦ].

「花を育てているのは父です。」

現実的文分節の理論は概略、以上のようにチェコ語やロシア語などの「自由な語順の」言語における語順のかき混ぜ現象を説明するが、語順は必ずしも変化するとは限らないことは注意しなければならない。例えば、上の文が「お父さんは何をしていますのですか？」という質問に対する回答として用いられる場合、*отец*「父」が主題、*разводит цветы*「花を育てる」が題述となり、結果以下のような文になる。

(3'') — *Что делает отец?*

「お父さんは何をしていますのですか？」

[topic ОТЕЦ] [comment РАЗВОДИТ ЦВЕТЫ].

「父は花を育てています。」

つまり、この場合、現実的文分節と形式的文分節が「たまたま」同様に行われ語順の変化も起こっていないのである。即ち、この現実的文分節の理論においては、形式的文分節と現実的文分節の「違い」によって「自由な」語順の変異を説明しようとしているわけであるが、この例のように、たまたま形式的文分節と現実的文分節が一致して、その結果、語順の変化が起こらない場合もあるのである。

以上、生成文法と現実的文分節の理論に基づいたロシア語の「自由な」語順に対する説明の試みを概観したが、いわば前者は語順が様々にかき混ぜられるにはどのような形式的プロセスで行われるかを説明したものであり、後者はその語順の変異がどのような状況で起こるかを説明しようとしたものであると言えよう。

上で提示した語順の移動に関する、節点Sへのチョムスキー付加とした形式的規則であるが、この規則と現実的文分節の理論は単に同じかき混ぜ現象の異なる側面を互いに異なる方向からそれぞれ説明した、と言うだけではない。生成文法的な形式的規則も機能主義的な現実的文分節の理論と関係づけることによってさらに説得力を増すことが可能になるのである。

まず、上記の規則はチョムスキー付加によって複数の要素が文頭の位置に移動することを認める。例えば以下の基本語順の文(a)から2つの要素、即ち *книгу* と *ему* を移動させると(b)のようになる。

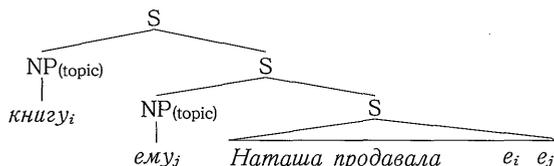
(4)

(a) Наташа            продавала ему            книгу.

Nataša-nom. sold            him-dat. book-acc.

「ナターシャが彼に本を売った。」

(b) [[topic *Книгу<sub>i</sub>*] [[topic *ему<sub>j</sub>*] [comment Наташа продавала *e<sub>i</sub> e<sub>j</sub>*]]].



ここで注目して頂きたいのは2つの主題が階層的に積み重なっていると言うことである。これは純粹に形式論的な観点からの考察により至った結論であるが、この様な主題の階層性については機能論的な視点に立つ現実的文分節の理論からも興味深い議論がある<sup>2</sup>。

Ковтунова (1976) は機能主義的な観点からの分析により、ロシア語には1文の中に複数の主題が現れうることを、そしてその場合それらの主題は「階層性」を有することを以下の様に論じている。(Ковтунова 1976 : 53)

(5) При наличии нескольких тем актуальное членение может носить ступе-

<sup>2</sup> 上のような規則を立てる形式論的な根拠については Hikita (1989), 匹田 (1993) を参照されたし。ここでは詳述しないこととする。

нчатный характер. Это значит, что первая тема относится к остальной части предложения как реме, реме же в свою очередь членится на вторую тему и рему и т. д. до последней ремы, или собственно ремы.

いくつかのテーマが存在する場合、現実的文分節は階層的な特徴を有することがある。即ち、最初のテーマは文の残りの部分にレーマとして関係し、次にそのレーマは第2のテーマとレーマに分析され…と最後のレーマ、あるいは本来のレーマまで続く<sup>3</sup>。

この見方に従うと、上述の例文(4b)では最初の主題 *книгу* は文の残りの部分、即ち *ему Наташа продавала* に対する主題として機能しており、その残りの部分の内、第2の主題である *ему* は *Наташа продавала* に対する主題として機能していることになる。

このような階層的な関係は純粹に形式論的に得られた結論を機能的な分析が別方向から支えていることになり、しばしば相矛盾することすらある複数の理論が同一の結論を支持していることになる。

以上、本節ではいわゆるかき混ぜ現象に見られる主題を移動によって文頭に置かれたものであるとし、この様な主題は現実的文分節の理論が説明しようとした「自由な語順」の説明を可能にするものであることを見た。また、移動の規則を節点Sへのチョムスキー付加としたことは形式的な根拠の他にも現実的文分節の理論からの機能主義的考察からも支持されるものであることを論じた。

<sup>3</sup> 「主題」と「題述」にあたる概念を示す用語は様々ある。例えば、ここで用いられているテーマとレーマの他に、トピックとフォーカス、トピックとコメント等あるいは、主題のことを発話の基礎、発話の出発点、旧情報など、また題述のことを発話の核、新情報など多様である。これらは考え方によっては区別して用いられることもあるが、本稿では厳密な区別は考慮しないこととする。

## 1.2. 移動によらない主題

前節 1.1. では移動規則の適用によって文頭に位置することで主題として機能していることが表示される主題構造について、生成文法及び現実的文分節の理論の両面から考察した。本節ではロシア語に見られる移動によらない主題構造について議論する。それらは前節で見た主題構造とは異なり、主題としての文頭の位置には移動規則の適用によって移動したものではない。それらは基底部に既に文頭の位置に生成されたと考えられるものである。

### (6) 移動による主題構造

$$[{}_s \text{ ..... XP .....}] \rightarrow [{}_s \text{ XP}_i [{}_s \text{ ..... } e_i \text{ .....}]$$

↑ 移動

### (7) 移動によらない主題構造

$$[XP [{}_s \text{ .....}]]$$

↑ 基底部で最初からこの位置に

移動によらず基底部で文頭の位置に生成される主題構造は、現在のところ、左方転移化要素、主格述語を持つ連結動詞構文の「主語」、形式題の *эмо*, の少なくとも3種類があると考えられる。詳しい分析・議論は匹田(1993, 1996, 1999)などを参照して頂くことにして、以下ここではこれらの移動によらない主題構造の概略の紹介にとどめておく。

### 1.2.1. 左方転移化要素

前節で触れたかき混ぜ現象における移動による主題構造に加えて、匹田(1993)ではいわゆる左方転移化要素に関する議論も行っている。ロシア語における左方転移化要素とは例えば以下の様なものである。

(8) Мария<sub>i</sub> — я е<sub>i</sub> люблю.

Марија-nom. I-nom. her-acc. love-1.sg.pr.

「マリヤは私が愛している。」

この例において、文頭の *Мария* が左方転移化要素であり、この文の主題として機能している。前節で扱ったかき混ぜと異なる点は、主題要素が文頭にあ

るだけではなく、それと同一指示の代名詞要素 *ee* が節の中にはっきりと存在しているという点である。この場合、*Мария* は *ee* の置かれている位置に基底部では存在していたものの何らかの規則の適用によって文頭に移動してその痕跡が *ee* として顕在化したのか、それとも、*Мария* にせよ *ee* にせよ、元々この位置に基底部で生成された、と考えるべきなのだろうか？ 匹田(1993)では後者の分析、即ち基底部で当初から文頭の位置に生成されたものであるとの解釈が正しいと結論づけた。その主たる根拠としてあげたのは概略、以下の各点である。

- (i) もし左方転移化要素 *Мария* が何らかの移動規則の適用により文頭の位置に移動したもので、その痕跡が顕在化したものが *ee* であるとする、単一の CHAIN が主格 (*Мария*) と対格 (*ee*) という異なる二つの格を持つことになるが、それは生成文法の一般理論に違反する。
- (ii) Hikita (1992) が明らかにした様に、通常ロシア語では従属節からの要素の移動による外置は認められない(9)が、左方転移化要素は従属節内の要素と関係づけられることが可能である(10)。

(9)

- (a) Наташа сказала, что Таня читает книгу.  
Nataša-nom. said that Tanja-nom. reads book-acc.  
「ナターシャはターニャが本を読んでいると言った。」

(b) \*Книгу<sub>i</sub>, Наташа сказала, что Таня читает *e<sub>i</sub>*.

- (10) Телевизоры<sub>i</sub> — я знаю, что в этом магазине их;  
televisions-nom. I-nom. know that in this shop-loc. they-gen.  
много.  
many

「テレビはこの店にたくさんあることを私は知っている。」<sup>4</sup>

<sup>4</sup> ロシア語では、*много* 「たくさん」に修飾される名詞は生格 (genitive) 形をとる。

### 1.2.2. 連結動詞構文の主格「主語」

ロシア語における移動によらない主題構造の第2のものは、主格述語名詞句を持ついわゆる連結動詞構文の主格「主語」である。ロシア語の連結動詞 *быть* はその述語名詞句が主格を与えられる場合(11)と造格 (instrumental) を与えられる場合(12)の2つのパターンがある<sup>5</sup>。

(11) Я            ∅            студент.

I-nom. be-pr. student-nom.

「私は学生だ。」

(12) Таня            была            студенткой.

Tanja-nom. be-f.pa. student-ins.

「ターニャは学生だった。」

匹田 (1999) では連結動詞 *быть* が主格述語をもつ場合、その文の一般に主語と呼ばれている要素は実は主語ではなく、むしろ移動によらない主題要素と考えるべきであると結論づけた。その結論に至る詳しい論拠は様々な問題が絡み合うので詳しくは匹田 (1999) を参照して頂くことにして、ここではその一端のみを紹介することとする。

(13)

(a) Высоцкий        ∅            хороший певец.

Vysotsky-nom. be-pr. good singer-nom.

「ヴィソツキーは言い歌手だ。」

<sup>5</sup> *быть* は現在時制で通常 ∅ になるが、*есть* という明示的な形式が現れることもある。また、*есть* はロシア語の他の動詞と異なり現在時制においても人称・数による屈折を行わないが、この語の形態的特殊性はこの点に留まらない。詳しくは匹田 (1999) 参照。さらに、現代ロシア語では述語の格は現在形で主格、それ以外で造格に大きく偏りが見られる。現代ロシア語とその通時的実態については匹田 (1999) の他、Шведова и др. (1980), Comrie, Stone & Polinsky (1996), Timberlake (1993) 等を参照されたし。なお、主格述語と造格述語の意味的差違については匹田 (1999) の他に、Кохтев и Розенталь (1984) など様々な実用語学的文法書に記述がある。

(b) Хороший певец  $\emptyset$  Высоцкий.

「良い歌手はヴィソツキーだ。」

これらはいずれもロシア語として問題のない適格文であり、少なくとも表面上の違いは語順の逆転のみであるが、この語順の逆転はどう説明されるべきものなのであろうか。可能な説明の1つ目は1.1.でも扱った、語順のかき混ぜ現象と捉えるもので、もう一つは(a)と(b)では主語と述語が入れ替わっているとするとするもの、即ち、(a)では *Высоцкий* が主語で *хороший певец* が述語、(b)では *хороший певец* が主語、*Высоцкий* が述語になっていると考える分析である。

かき混ぜ説から考えてみよう。1.1.で述べた様にロシア語のかき混ぜ現象における語順の変異は3つの要素からなる文であれば  $3 \times 2 \times 1 = 6$  通りの可能性がある。この場合ももしかき混ぜなのであれば全ての語順の変異が可能であると予想される<sup>6</sup>。

(14)

(a) Ваня            есть        студент.

Vanja-nom. be-pr. student-nom.

「ワーニャは学生だ。」

(b) Студент есть Ваня.

(c) \*Студент Ваня есть.

ところが、例文(14)を見ると全ての語順の変異が認められるわけではなく、認められるのは *Ваня* と *студент* を入れ替えたものだけであることがわかる。これはかき混ぜとは語順の変異の容認可能性が異なり、これらの語順のバリエーションはかき混ぜによるものではないと考えることができる。

では、(13)の語順の変異は主語と述語の交代によるものなのであろうか？

<sup>6</sup> 現在形を  $\emptyset$  とすると語順の変異が見えないので顕在的な *есть* を含む文を例とする。なお、 $\emptyset$  と *есть* の違いは少なくとも形式論的なものは今のところ確認されていない。

しかし、主語と述語の関係が明らかにわかる造格述語名詞句を用いた文を見るとその分析にも問題があることがわかる。

(15)

(a) Высоцкий            был            хорошим    певцом.  
Vysotsky-nom. be-pa.m. good-ins. singer-ins.

「ヴィソツキーは良い歌手だった。」

(b) \*Хороший    певец            был            Высоцкий.  
good-nom. singer-nom. be-pa.m. Vysotsky-ins.

「良い歌手はヴィソツキーだった。」

(b)は主格と造格が与えられている名詞句を交代させることにより明示的に主語と述語を交代させているが、それは非文になる。つまり主語と述語の交代は認められないのである。このことから(13)の語順のバリエーションは主語と述語の交代でもないことがわかる。

それでは何なのか？ 匹田(1999)では様々な観点から分析を加えた結果、この構文で見られる1つ目の主格名詞句と2つ目の関係は主語・述語の関係ではなく、主題と題述の関係であると結論づけた。詳細な議論は匹田(1999)を参照して頂きたいが、ここで重要なことは、最初の主格名詞句は移動によって文頭の位置にもたらされた主題構造ではなく、左方転移化要素同様、基底部に既に主題としてこの位置にあったものであると考えるべきである、と言うことである。

### 1.2.3. 形式題の это

ロシア語において観察される移動によらないもう一つの主題構造は山崎(1990)が「形式題」と呼ぶ *это* である。この *это* は本来的には指示代名詞 *этом* 「この、その」の中性形であるが、ここで問題とする「形式題」とは例えば以下のような環境で *это* が用いられているものである。

(16) Это            птицы            летят.  
this-n.nom. bird-pl.nom. fly-3.pl.pr.

「それは鳥が飛んでいるのだ。」

この *это* は談話機能的には主題として機能し、形式的にはその後構造上完全な文を先導する<sup>7</sup>。そして、*это* は当然その後続する文の要素とは考えられず、従って、左方転移化要素や連結動詞構文の主格名詞句と同様に、移動によって文頭に位置する主題であるとすることはできない。即ち、これもまた基底部で当初から文頭に生成された移動によらない主題構造なのである。さらに匹田 (1996) はこの様な *это* の他に、以下の様な例に見られる *это* も移動によらず基底部で文頭に生成される形式題であると結論づけた。

- (17) Это                была        школа.  
       this-n.nom.    be-f.pa.    school-f.nom.

「これは学校だった。」

詳しい議論はここでは触れないが、匹田 (1996) はこれを、前節で考察した通常の連結動詞構文ではなく、上述の形式題 *это* がいわゆる名詞文 (номинативное предложение) を先導している構造と分析した。名詞文とは以下の様なものである：

- (18) Была        весна.  
       be-f.pa.    spring-f.nom.

「春だった。」

即ち、(17)は図式的に表現すると以下の様に分析したことになる。

- (17') Это                была школа.  
       形式題            名詞文

匹田 (1996) ではこの結論に至るにはいくつかの根拠が示されたが、その中で最も重要なものは動詞の一致する対象が中性の *это* ではなく女性名詞である *школа* であると言うことである。

また、否定の小詞 *не* の置かれる位置も連結動詞構文とは異なり、名詞文と

<sup>7</sup> 非常に大まかに言えば、*это* の直後に来る要素に強調が置かれ、全体として英語の分裂構文 (cleft sentence) と似た用いられ方をするとも言えるかも知れない。

同じになることも根拠の一つと考えられる。

- (19) Это была не Наташа.  
this-n.nom. be-f.pa. not Nataša-f.nom.

「これはナターシャではなかった。」

- (20) Лингвистика не есть увлечение.  
linguistics-nom. not be-pr. pleasure-nom.

「言語学は遊びではない。」

以上、本節では形式題 *это* が左方転移化要素や連結動詞構文の主格「主語」と同様に移動によらない主題構造であることを示した。

#### 1.2.4. 形式的文分節と現実的文分節の一致

以上、ロシア語に見られる3種類の移動によらない主題構造を概観した。これらはいずれも基底部で文頭の位置に生成され、かき混ぜ現象に見られる主題構造とは異なり文頭に移動されたものではない。

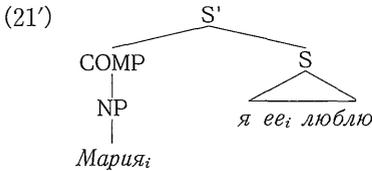
1.1. で見たかき混ぜ現象に見られる主題構造は形式的文分節による「主語・述語」の分節に加えて現実的文分節のレベルでの「主題・題述」の分節を考慮に入れることによってその語順の変異を説明した。異なる言い方をすれば、形式的文分節と現実的文分節の違いが語順の様々なバリエーションを生み出すのである。

では、本節で見た移動によらない主題構造はどのように捉えるべきなのであろうか？ 匹田 (2001) ではこのような主題構造を「本来的な」主題と捉え、この構造に置いては形式的文分節が現実的文分節を示すために存在する、即ち形式的文分節と現実的文分節が本来的に一致している構文と解釈した。

- (21) (= 8) Мария<sub>i</sub> — я е<sub>e</sub> люблю.  
Marija-nom. I-nom. her-acc. love-1.sg.pr.

「マリヤは私が愛している。」

この文の句構造は大まかには以下の様になる<sup>8</sup>。



ここで、 $S'$ の下、COMPとSの間の分岐は、基底部で最初から用意されたものであり、それ故形式的文分節であると言えるが、その一方で主題と題述の間の分岐でもあることから現実的文分節であるとも言えよう。即ち、この分岐は形式的文分節が現実的文分節を表現するために存在している場合と言えるのである。

つまり、生成文法的な言葉でこれらの主題構造を表現するならば、これらは「移動によらず基底部で当初から用意されている主題構造」と呼ぶことができ、現実的文分節の理論に照らし合わせて考察するならばこれらは「形式的文分節と現実的文分節が本来的に一致している<sup>8</sup>、即ち形式的文分節が現実的文分節を表現するために存在している構造」と言うことができると考えられる。

## 2. 類型論からの視点

前節ではロシア語の主題構造に関する純粹に形式論的な立場から行われた生成文法的分析を機能主義の立場に立つ現実的文分節の理論の視点から見るなどの様に解釈されるかを見た。

本節ではロシア語の主題構造についても一つの理論的立場、即ち類型論

<sup>8</sup> ここで *Мария* が厳密にどこに位置しているかは難しい問題ではあるが、*я ee люблю* を支配する節点Sよりは外にあることは間違いないと思われる。匹田(1993)は節点COMPに支配されていると分析した。

<sup>9</sup> この二つの分節が一致していると言うことは上の(3")で見た場合とは区別して考えなければならない。(3")の構造はあくまでもいくつもの可能性のある現実的文分節の中でたまたま形式的文分節と同じ分節になった、と言うだけであるが、(21')の例は本来的に両者が同じであり、二つの分節がずれることはない。

の立場からの考察・分析を行う。類型論は様々なパラメータによって言語の分類を試みるが、ここで採り上げるパラメータは Li & Thompson (1976) が提案する「主語卓越型言語」と「主題卓越型言語」という2つの言語タイプを区別するものである。以下、2.1. ではこれらの言語がそれぞれどのようなものかを概説し、続く2.2. では1. で生成文法及び現実的文分節の視点から考察したロシア語の主題構造にこの様な類型論の見地から分析を加えることとする。

### 2.1. 主語卓越型言語と主題卓越型言語

Li & Thompson (1976) には類型論に関する新たなパラメータが提案されている。それは「主語・述語 (subject-predicate)」の関係と「主題・題述 (topic-comment)」のどちらを基本構成原理として文が構成されているかに着目したものであり、その言語の文が前者、即ち「主語・述語」の関係を基本構成原理として構成されている場合、その言語は「主語卓越型言語 (subject-prominent language)」であると言い、後者、即ち「主題・題述」の関係がその言語の文の基本構成原理として採用されている場合その言語を「主題卓越型言語 (topic-prominent language)」と呼ぶ。Li & Thompson (1976: 459) には以下のような説明がある（下線も Li & Thompson による）：

(22) In subject-prominent (Sp) languages, the structure of sentences favors a description in which the grammatical relation subject-predicate plays a major role; in topic-prominent (Tp) languages, the basic structure of sentences favors a description in which the grammatical relation topic-comment plays a major role.

主語卓越型言語においては、文構造が「主語・述語」という文法的関係が主要な役割を果たすような記述を好み、主題卓越型言語においては、文の基本構造が「主題・題述」という文法的関係が主要な役割を果たすような記述を好む。

ちなみに主語卓越型は、例えば英語のように主語と述語の関係が文の基本的な構成原理となるものなので、我々日本人には圧倒的にこちらのタイプの言語の方がなじみ深いと言えるだろう。

Li & Thompson (1976) はリス語を非常にはっきりとした主題卓越型言語の例と考えており、例えば以下のような例を示している。

(23) lāthyu nya                      ānā khū - ǵ  
 people topic marker dog bite - declarative marker  
 「人々は犬を咬む」 / 「人々は犬が咬む」

(24) ānā lāthyu nya                      khū - ǵ  
 dog people topic marker bite - declarative marker  
 「犬は人々を咬む」 / 「犬は人々が咬む」

例文(23)と(24)はいずれも動作主がどれかと言う点に関しては全く同様に曖昧であり、両者共に「人々が犬を咬む」場合と「犬が人々を咬む」場合のどちらにも用いることができる。つまりリス語におけるこの様な文構造では、動作主(主語)や被動者(目的語)がどの名詞句かと言う問題は無視されており、どの名詞句が主題かという談話機能上の性質のみに主眼が置かれて文が組み立てられているのである。即ち、リス語の文構造上関係するのは *nya* によって明示的に表示され文頭に置かれる主題要素がどれか、と言った「主題・題述」関係のみであり、主語がどれかと言う「主語・述語」関係は無関係である。

その一方、主語卓越型言語において文の基本構成原理として採用されているのは「主題・題述」の関係ではなく「主語・述語」の関係である。

(25) [subject Mary] [predicate really loves John].

「メアリーは本当にジョンを愛している。」

また、主題卓越型言語において「主題・題述」構文がより基本的であることを Li & Thompson (1976) が示す際に：

(26) Our aim in this section will be to show that topic-comment structures in Tp languages cannot be viewed as being derived from any other

sentence type. (Li & Thompson 1976: 471)

この節での我々の目的は主題卓越型言語における「主題・題述」構造は別の何らかの文タイプから派生したものとは見なせないことを示すことにある。

と述べていることから明らかなように、主題卓越型言語に置いてはそもそも文構造が原理的に「主題・題述」の関係によって成り立っており、ここで主題は基底部における「主語」から何らかのプロセスによって派生したものである。それ故逆に、主語卓越型言語においては主題を統語的に表示する場合、典型的には何らかのプロセスによって「主語・述語」構造から「主題・題述」構造を派生させる必要がある。例えば英語においては、上の例文(25)から以下のような文を派生させることができる。

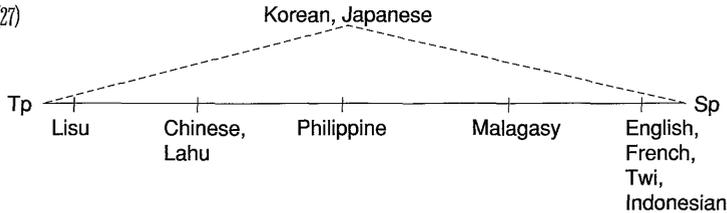
(25') [topic John<sub>i</sub>], [comment Mary really loves e<sub>i</sub>].

ここでは *John* が主題として文の先頭に移動しているが、英語においてはこのような場合伝統的に主題化 (topicalization) というプロセスを想定することによって、(25)から (25') を派生させている。

また、注意すべきは主題卓越型と主語卓越型は全ての言語がこれらのどちらかに属すると考えられるような、厳密に二分できるパラメーターではない。それらはいくまで程度問題で、そこにあるのは連続体である。例えば、Li & Thompson (1976: 483) には以下の(27)のような連続体が図式的に示されており、様々な言語が様々な主語卓越的特徴と主題卓越的特徴を有している、あるいは有していないことが示されている。即ち、リス語は中国語よりも主題卓越的な特徴をより強く持っているし、英語やフランス語はマラガシー語よりも主語卓越的である、と言うことになる。なお、主題卓越型言語と主語卓越型言語の中間点には下にフィリピン諸語が、上に朝鮮語と日本語が位置しているが、フィリピン諸語は「それほど主題卓越型でも主語卓越型でもないように思える (Philippine languages, ... seem to be neither highly Sp nor highly Tp)」とされ、また朝鮮語や日本語は「主題卓越型でもあり主語卓越型でもありとすることができる (Japanese and Korean could be described as both

Sp and Tp)」とされている。

(27)



この図では、中国語（北京語）はリス語より主題卓越型言語としての特徴が若干少ないとされてるのが見て取れるわけであるが、それは中国語にはリス語と異なり、「主語・述語」の関係を文の基本構成原理とするような構文があるからである。例えば：

(28) Wōde dīdi xǐhuān chī píngguǒ

my brother like eat apple (Li & Thompson 1976: 477)

「私の兄はリンゴを食べるのが好きだ。」

この文で主語名詞句が文頭に置かれてることからも明らかなように、中国語では英語という主語卓越型言語同様に主語を文頭の位置に置くことによってマークする。また：

(29) Zhāng-sān mǎi le piào jǐnqu

Zhang-san buy asp. ticket go in (Li & Thompson 1976: 478)

「Zhang-san は切符を買って入っていった。」

例文(29)において、は従属節の動詞 *jǐnqu* の主語は主動詞 *mǎi* の主語と同じになり、ここでも「主語」という概念が文構造上一定の役割を果たしていることがわかる。

しかし、上で中国語が主題卓越型言語の特徴を色濃く持っているとしたことから明らかなように、「主題・題述」構文が「主語・述語」構文から派生したものではないと考える理由は中国語にも当然ながら種々見られる。

(30) Dōngwu wǒ zǔzhang bǎo-shòu zhèngcè

animal I advocate conservataion policy

(Li & Thompson 1976: 479)

「動物については私は保護政策を支持する。」

例えば、例文(30)において、主題として機能している *dōngwu* 「動物」は動詞 *zūzhang* から要求されるものでもなく、「主語・述語」の関係にこの主題の存在を結びつけることはできない。この文では「主題・題述」の関係が基本的な構成原理として働いていることが見て取れる。

ちなみに、図(27)において日本語は朝鮮語と共に主題卓越型言語の特徴と主語卓越型言語の特徴の両者を持ち合わせていることが示されていたが、これは(31)のような「主語・述語」の関係が文の構成原理として機能している場合と、(32)のように「主題・題述」の関係が重要な役割を果たしている場合の両者があるからであろう。

(31) [subject 私が] [predicate 本を 読んでいる]。

(32) [topic 像は] [comment 鼻が 長い]。

また、(31)の主語部分の格助詞「が」を「は」に変えた以下のようなものもあるが：

(31') [topic 私は] [comment 本を 読んでいる]。

この場合は、「は」という主題標識を用いていることから明らかなように「私は」が主題として機能している。しかし、この例はあくまでも(31)から何らかのプロセスによって派生されたものとみなすべきで、(32)のような例とは区別して考えなければならない。(31')で文の構成原理として機能しているのはあくまで「主語・述語」の関係である。

## 2.2. ロシア語に見られる主題卓越型特徴

ロシア語は当然のことながら英語や他の印欧語と同様に非常に強い主題卓越型言語である。その意味で大まかに捉えてロシア語を「主題卓越型言語」と呼んでも差し支えないと思われる。

(33) [subject Ваня] [predicate читает журнал].

Vanja-nom. reads magazine-acc.

「ワーニャは雑誌を読んでいる。」

- (34) [subject Он] [predicate живет в Москве].  
 he-nom. lives in Moscow-loc.

「彼はモスクワに住んでいる。」

- (35) [subject Она] [predicate помогает маме].  
 she-nom. helps mother-dat.

「彼女はお母さんを手伝っている。」

これらの例はいずれも、動詞の格支配などは様々であるものの、一様に文の構成原理が「主語・述語」の関係に依っている。そして、主語と述語を表示することをその基本的構成原理としているロシア語の文に主題と題述という関係を持ち込むために移動という方法をとって文の構造を変換するという手段をロシア語がとることは 1.1. 節で見た。

- (33') [topic Журнал<sub>i</sub>] [comment Ваня читает  $e_i$ ].

- (34') [topic В Москве<sub>i</sub>] [predicate он живет  $e_i$ ].

- (35') [topic Маме<sub>i</sub>] [predicate она помогает  $e_i$ ].

ロシア語の文が若干の例外を除いてこのように「主語・述語」の関係の上に成り立っており「主題・題述」の関係を表現しようとするれば移動など何らかの手段に従って派生を行う必要があると言うことはとりもなおさずロシア語が主語卓越型言語の特徴を非常に色濃く有していると言うことを意味する。前節 2.1. の(26)でも述べられている様に、ある構造が基本的なものであるためには何らかの構造からの派生というプロセスが介在してはいけないのであるから。

この様にロシア語の一般的な文タイプが「主語・述語」の関係、即ち形式的文分節を表現することをその基本構成原理としており、「主題・題述」の関係、つまり現実的文分節を表現しようとするると何らかの派生を行わなければならない、つまりロシア語は基本的に非常に強い主語卓越型言語であることは否定しようのない事実である。それにもかかわらずロシア語にも主題卓越型特徴が全く見られないわけではない。2.1. 節で述べた様に、主語卓越型・主題卓越型の類型的分類はあくまで程度問題であり、実態は多くの言語が連

続体上に分布しているのだから、ロシア語にも主題卓越型特徴が観察できることは十分あり得ることである。

それが1.2.節で考察した3つの構文、即ち左方転移化要素、連結動詞の主格「主語」、形式題の *это* であると考えられる。

(36) (= 8) 左方転移化要素

[Мария<sub>i</sub> ] [я ee<sub>i</sub> люблю].

Marija-nom. I-nom. her-acc. love-1.sg.pr.

「マリヤは私が愛している。」

(37) (=14) 連結動詞の主格「主語」

[Ваня ] [есть студент].

Vanja-nom. be-pr. student-nom.

「ワーニャは学生だ。」

(38) (=17) 形式題の *это*

[Это ] [была школа].

this-n.nom. be-f.pa. school-f.nom.

「これは学校だった。」

これらの構造3種とも共通していることは、主題 (*Мария, Ваня, это*) とそれ以外の間に入る句構造上の分岐が基底部で用意され、文の基本構造を決める形式的文分節であると同時に主題と題述を区別する現実的文分節でもあるということであることは1.2.で見た<sup>10</sup>。

これらの主題構造はいずれも「主語・述語」という関係で捉えられるもの

<sup>10</sup> それぞれの厳密な句構造が完全に解決されてるとは残念ながらまだ言えないので、ここでは簡略化した句構造を示すのみに留まる。また、主格主語及び主格述語を持つ連結動詞構文に関しては二項枝分かれではなく三項枝分かれかも知れない。匹田 (1999) はこの構文の句構造に三項枝分かれを想定した。それは二つの名詞句に同様に主格を付与することを実現するためのものであったが、実証できたとは言いがたい。ちなみに、Babby (1980) も同様の構造を想定しているが、"something like this" 「何かこの様なもの」と言及しており、甚だ歯切れが悪いのも同様である。

ではなく、その構造の根底にあるのはあくまでも「主題・題述」の関係である。そしてかき混ぜの例で見られた様な別の文タイプからの派生、というプロセスもないことが確認されている。そして、この「派生ではない」ということがその構文が基本的なものかどうかを断定する際に重要な決定要因になることは 2.1. で見た。この様なことからこれらの構造は、その基本的な構成原理として「主題・題述」の関係を採用している主題卓越型構文であると言えることができるだろう。

ロシア語は上でも述べた様に、他の印欧語と同様に主語卓越型の特徴が極めて強い言語であるといえるが、主語卓越型と主題卓越型の分類はあくまで連続体であり、離散的に分類できる様なものではない。これらの構文はロシア語という主語卓越型言語にかすかに見られる主題卓越型言語の特徴であると言えるのである。

### 3. おわりに

以上、本稿ではロシア語に見られるいくつかの主題構造を生成文法、現実的文分節、類型論の三つの理論それぞれの立場から考察した。第 1 節では、生成文法の立場からロシア語の主題構造は、移動によって文頭にもたらされるもの、つまり他の構文からの派生によって生成されるものと、基底部で当初から文頭の位置に置かれ移動などの派生プロセスに依らないものとの少なくとも 2 種類があり、後者として左方転移化要素、主格述語を持つ連結動詞構文の主格「主語」、形式題の *emo* の 3 種が挙げられた。次いでそれらの構造に現実的文分節の理論から考察を加え、移動によらない主題構造は形式的文分節と現実的文分節が本来的に一致しており、形式的文分節が「主語・述語」ではなく「主題・題述」の関係を示すために存在している構造であると考えた。

第 2 節ではそれらを類型論の立場から考察した。それにより、ロシア語は主語卓越型言語であるがその中であって移動によらない主題構造はロシア語

が示す数少ない主題卓越型言語の特徴であると結論づけた。

言語学は時として「言語学者の数だけ言語学がある」などと言われるほど多くの理論的枠組みが存在している。そして研究者は自らの属する理論の内部でのみ通じる論理を展開することもしばしばである。しかし、それは場合によっては「理論のための理論」を展開することとなり、他の理論に属する研究者からは何の説得力も実証性もない空虚な論考になる可能性が残る。例えば、生成文法に対して強い反感を抱いている言語学者は多いが、それはこの理論に属する言語学者が「排他的」と言っても過言ではないほどその理論内に閉じこもった理論を展開することも一つの理由となっているとも思われる。しかし、だからといって生成文法が言語学全体の発展にとって何の貢献もしてこなかったわけではない。それは一つには自らの理論の中に深く入り込むことによってこそ生み出すことのできる成果が現実に存在することもあるが、それ以上に、生成文法が言語学の発展に大きく貢献しているのは、この高度に自己完結的な理論においても他の枠組みの研究者に広く認められ受け入れられている成果が多く存在するからである。言語学における理論的な考察は、当該理論の外にいる研究者にとっても説得力があるかどうか非常に重要であることは言うまでもなからう。

本稿の目的の一つは、当初生成文法的な形式主義から始めたロシア語の主題構造に関する考察が他の理論から見ても説得力を持ちうるものであることを示すことにある。もちろん、まだまだ説明できていなかったり特定できなかったりする点は多々残るが、複数の理論からの説明可能性もある分析の一つの論拠となりうるのではないか。

## 参考文献

- Babby, L.H. (1980) *Existential Sentences and Negation in Russian*, Karoma.  
Bailyn, J.F. (2003) "Does Russian Scrambling Exist?," in S. Karimi (ed.) *Word*

- Order and Scrambling*, Blackwell.
- Comrie, B., G. Stone, M. Polinsky (1996) *The Russian Language in the 20th Century*, Oxford.
- Hikita, G. (1989) *Some Formal Aspects of Russian Word Order*, unpublished M. A. thesis, Hokkaido University.
- (1992) “Extrapolation of Elements Out of Some Syntactic Categories in Russian”, *Gengo Kenkyu*, 102.
- Li, C.N. and Thompson, S.A. (1976) “Subject and Topic: a New Typology of Language”, in C. N. Li (ed.) *Subject and Topic*, Academic Press.
- Timberlake, A. (1993) “Russian”, in B. Comrie and G. G. Corbett (eds.) *The Slavonic Languages*, Routledge.
- Адамец, П. (1966) *Порядок слов в современном русском языке*, Academia.
- Ковтунова, И. И. (1976) *Современный русский язык: порядок слов и актуальное членение предложения*, Просвещение.
- Крылова, О.А. и С. А. Хавронова (1984) *Порядок слов в русском языке* издание 2-е, исправленное и дополненное, Русский язык.
- Кохтев, Н. Н. и Д. Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Русский язык.
- Шведова, Н.Ю. и др. (1980) *Русская грамматика*, т. 2., Наука.
- 匹田剛 (1993) 「ロシア語における 2 つの統語的トピックについて」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 86 輯。
- (1996) 「ロシア語における連結動詞と主格名詞句を先導する это をめぐって」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 91 輯。
- (1999) 「ロシア語のいわゆる連結動詞現在形の特殊性について」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 97 輯。
- (2001) 「ロシア語における移動によらないトピック構造について」, 『小樽商科大学人文研究』, 第 101 輯。
- 山崎紀美子 (1990) 『ロシア語の構文』, くろしお出版。